古民家だより

No.73
令和6年(2024年)12月 13 日(金)
越谷市教育委員会　生涯学習課

詩人は全霊をもって言葉を紡ぎます。最近の言葉の様子について、谷川俊太郎さんは「言葉が氾濫して、言葉のインフレーションになっている。」と生前に語っておられました。 言葉はそれを使う民族や国の在り様を表します。

留学生から学ぶ 日本文化の特徴

11月1日、文教大学で学ぶ留学生27名が旧東方村中村家住宅を訪れました。母国は中国11名、韓国5名、スリランカ4名、バングラディシュ3名、タジキスタン2名、ミャンマーとニュージーランドが1名ずつの方々でした。見学後にアンケートに応えて頂きました、

どんな日本文化に興味がありますか？（(　)の数字は回答数※複数回答あり）

・和食（7）　・アニメ（6）　・建築（5）　・和服（4）
・歌舞伎（3）　・茶道（3）　・お祭り（2）　・相撲（2）
・日本人の特性（礼儀正しさ　など）（2）
以下は各1名　・盆踊り　・二次元文化　・ライトノベル　・日本語
・和菓子　・古墳時代の歴史　・桃山時代の歴史　・日本史
・特撮　・厠の使い方　・ファッション　・ハイテク　・ゲーム
・生活様式　・インテリア　・舞台芸術　・政治経済産業

「日本語そのものに魅かれた」

このように応えた中国からの留学生がいました。以下に原文のまま紹介します。

特に発音、文法と語意はものすごくきれいですてきだと思います。(a)母音と子音は１対１ですから、韻律やリズムなどが耳に幸せだといっても過言ではないじゃないかと存じております。(b)和語と漢語の組み合わせは視覚的にきもちよいですが、(c)和語の抽象性も中国語にあまりないので、一つの単語に幅広い意義があるのは不思議とも言えます。

上記の文章については市民活動支援課の助言を頂き、また『新潟産業大学人文学部紀要』第16号所収の「中国人と日本人における言語表現の違い」(方　懋、高　鵬飛 著)を参考にして、以下のように捉えてみました。

下線部(a)⇒日本語は母音(a,e,i,o,u)と子音(母音以外)が組み合わされています。例えば「桜(さくら)」は「sa･ku･ra」と発音することと、英米語や中国語よりも抑揚がなだらかであることが、耳に心地よいということなのでしょう。中国語では四声(しせい)という抑揚がはっきりしていて、同じ発音でも抑揚によって意味も文字も異なります。例えば、「mā」と平らに発音すると「媽」(お母さん)になり、「má」と尻上がりの発音は「麻」、「mǎ」は「馬」、「mà」は「罵」(ののしる)という意味になります。(繁体字で表記しました。)

下線部(b)⇒日本語の文章が「かな(ひらがな)」と「漢字」の両方を用いていることを指しています。ワープロ活字よりも手書きにすると、その視覚的なリズム感がはっきりします。

下線部(c)⇒一つには中国語は主語を欠かせないけれど日本語では度々省略されることによる主体者の主張の強弱。二つ目には日本語には婉曲(えんきょく)的な表現(遠回しな言い方、曖昧な表現)が多いことのようです。これらのことは時には短所にもなるのですが、この留学生は“奥ゆかしさ”(相手を尊重する深い心遣い)とも感じられるということなのでしょう。

短い時間でしたが、留学生との交流を通して、普段無意識に使っている日本語の他言語と比較した特徴を改め

て認識する時間となりました。そして日本語の特徴を魅力として捉えてくれたことで、このような交流は今こそ大切なことだと改めて認識する機会となりました。

留学生達はまた、日本の伝統的住宅が多種類の植物を、その特性を生かして造られていることにも関心を示していました。

五感を使って学ぶ

10月以降は市内小学校4校の社会科見学（旧東方村中村家住宅）がありました。児童（3年生）の言動には「はっ」とさせられるものが毎回あります。

ないものに気づく（花田小学校）

普段、自分の実生活でも観察しているのでしょう。その児童は**「水はどうやっていたの？」**と尋ねたのです。中村家住宅には水回りの施設設備は復元されていません。電気がまだ通ってなかった時代、各戸には井戸が掘られていました。釣瓶（つるべ）を投じて水を汲み上げたのです。土間には水瓶が置いてありました。風呂水も何度も井戸水を汲み上げました。生活に必ず必要な水回り設備ですが、“ないものに気づく”ことは多くありません。

「人類はどうやって火を起こしたの？」（弥栄小学校）

昔の明かり体験でのことでした。電気がなかった時代の火起こしから行う時間はなかったので、ライターで灯芯や蝋燭（ろうそく）に着火しました。人類が火を使うようになったのは数十万年前と言われていますが、ヒトの手で火を起こすことが出来ない時代がその大部分でした。木と木をこすり合わせたり石と石を打ちつけたりして火種を作り、それを徐々に大きな火にしていく方法が考え出されるまでに、何十万年もかかったのです。

この児童の疑問は灯明や蝋燭の明かりを体験して、更にそれ以前のことに思いをいたしたものでした。

土間床に手で触れる（蒲生南小学校）（川柳小学校）

これまでになかったことで、案内した職員もハッとさせられました。土間は現代住宅にはほぼ見られない部屋なので、社会科見学では丁寧に説明する場所の一つです。土間の床は粘土に苦汁（にがり）と石灰を混ぜたものを分厚い板で丹念に叩（たた）いて成形するので、三和土（たたき）と言われます。三和土は天候（湿度、温度）によって状態が変わるので、“呼吸している”と言う人もいます。中村家住宅でも状況に応じて適度な水打ちをしています。

このようなことを説明した時でした。何人かの児童がしゃがんで掌（てのひら）を三和土に当てたのです。職員が誘ったわけではありません。自らそのようにしたのです。

土の文化（土間・壁・土器）への関心（川柳小学校）

土間や土壁の構造について学び、更に大昔の土器に触れた児童は、日本の古来の文化に粘土も大切な要素だったことに気づきました。でも、学校の工作で用いる油粘土とは明らかに違うことに、新たな疑問が生じました。**「粘土ってどうやって作るの？」、「粘土はどこで採れるの？」**などと質問しました。そして見て触ったことから、縄文土器と土師器（はじき）（古墳時代以降）の違いにも気づいたようでした。

土壁の成形工程

これらの出来事は、ヒトは本来自らの五感（視、聴、嗅、味、触）をフルに使って学んできたという学習の本質的なことを示しているのではないでしょうか。各小学校でもその原点を大切にしているのでしょう。

皆様、どうぞよい年をお迎えください。